“Little Lord Fauntleroy” の邦訳にみる外来語の変遷と継続
－明治中期から現代まで－

クロス　尚　美

1．はじめに

西洋の文物、物事を取り込むために、明治期の日本語は「翻訳」を通して大きく変化を遂げた。その翻訳を担ったのが、作家、文筆家であった。加藤（2012）は、明治期の翻訳の担い手は、文学作品の創作を志す若き日の文豪たちであり、翻訳は文学的営為そのものであったとしている。若松賤子が翻訳家として活躍したのは明治中期であり、その翻訳を通して、次世代を担う若い読者層に与えた大きな影響を考えると、若松賤子の文体が、いわゆる文豪と呼ばれる作家たち以上に現代日本語の成立に貢献しているのではないかと考えられる（Cross 2013、クロス2014）。この仮説検証の試みのひとつとして、本稿では Frances Hodgson Burnett 作の “Little Lord Fauntleroy”（以下 LLF と略す）の初めての言文一致体翻訳である若松賤子の『小公子』を取り上げ、その中で用いられる人名や国名などの固有名詞を含め、西洋語音をカタカナ表記して形成される外来語に着目する。若松賤子訳、若松と同時代の他の作家の作品や雑誌掲載の記事、同時代に出版された国語辞書である『言海』、さらに LLF の現代語訳である村岡花子訳（1956年出版）と坂崎麻子訳（1987年出版）を比較対照することで、およそ100年の間に外来語がどのように変化したか、あるいはどのように継続しているのかを考察する。外来語が辞書に収録されていることが、そのまま一般語彙として知られ、日常使われているという証しにはならない。そこで、いろいろな機関、研究者が提唱する「基本語彙」に収録されているかどうかで、一般化の程度を図ることとする。

2．研究の概要

本章では、原作者の言語観をふまえた研究の背景、研究の方法、研究の資料、さらに語彙の一般化の尺度としての基本語彙に分けて、研究の概要を述べる。

2.1. 研究の背景

本稿は "Little Lord Fauntleroy" の邦訳三作を考察の対象とする。LLF の作者、Frances Hodgson Burnett（1849－1924）は、英国に生まれるが、16歳のときに一家で米国に移住している。Thwaite（1994、2014）は、その家庭環境、アメリカに移住したいきさつ、アメリカでの人間関係などから、Frances Hodgson Burnett が自身の継承するイギリスの文化、イギリス英語を強く意識していたことを指摘している。その意識が、Burnett の数々の作品の中で、主人公が英国に「帰る」ことをテーマにすることに現れているのではないかと述べている。アメリカに生まれ育った主人公が、イギリスの祖父のもとに渡るという内容の LLF でも同様のことがいえるのではないだろうか。Burnett の作品の中の会話部分では、アメリカ英語とイギリス英語、それぞれの社会での階級差から生まれる言葉遣いの違いが強調されている。それは同時に、米国と英国のふたつの文化がステレオタイプ化しているということでもあり、それぞれの社会で象徴的な語彙や表現がある。例えば1837年創業のニューヨークの宝飾店 Tiffany や、英国の貴族の子息たちの学校であった Eaton コレッジ、さらには同じ使用人でもそのランクに応じた言葉遣いがあるなど、翻訳に際しては様々な難しさがある。若松賤子が LLF の翻訳を手掛けるのは、原作出版のわずか 4 年後のことである。西洋の文物が日本に紹介されるようになってやっと20余年のことで、それらを表現することばがどんどん造語される時期でもあった。そうした状況で若松賤子の先駆的な言文一致体による翻訳がなされたのであり、現代日本語との関係を考察するうえで、非常に興味深い。

2.2. 研究の方法

外来語の変遷と継続を考えるにあたり、本稿の起点となるのは1890-2年に発表された若松賤子訳『小公子』である。外国語音をそのままカタカナ表記したもののうち、国名、都市や地域名を表す語を取り分けて集計し、「英国」「米国」などの翻訳語と重なるものも含めて、村岡訳、坂崎訳と比較対照する。さらに人名においても、同一人物の名前が若松訳、村岡訳、坂崎訳でどう継続し、または変化するかを調べる。外来語のうち、一般名詞として使われる異なり語についても、同様に検証する。さらに、若松賤子と同世代、あるいは明治後半から大正にかけて女性雑誌に発表された作品中の外来語とも対照することで、若松訳の特徴を検証する。

2.3. 研究資料

本稿で扱う資料は、原作と翻訳、辞書、文献コーパスを含むデジタルアーカイブの 3 種である。

2.3.1. 原作と翻訳

本稿では、次にあげる原作と翻訳 3 件を、検証の対象とする。

原作　Frances Hodgson Burnett　1886 "Little Lord Fauntleroy"
http://www.gutenberg.org/files/479/479-h/479-h.htm で公開

翻訳①a 若松賤子訳　1890-2 『小公子』www1.gifu-u.ac.jp で公開、
底本『女学雑誌』227～237号
および『復刻版　女学雑誌』(1986) 大空社

翻訳①b 若松賤子訳　1927『小公子』(巌本善治編・後序)　岩波文庫

翻訳②　村岡花子訳　1958『小公子』少年少女世界文学全集　第13巻　講談社

翻訳③　坂崎麻子訳　1987『小公子』偕成社文庫

2.3.2. 辞書

明治期の翻訳語、外来語、および一般語がどのようなものであったか知る手掛かりとして、『言海』がある。近代の国語辞典の第 1 号とされる『言海』は、明治22年から24年（1889－1991）にかけて、4 分冊で出版されている。これは若松賤子が『小公子』を発表した時期より 1 年早い。本稿では、『言海』の628刷（昭和 6 年刊）を底本にした、ちくま学芸文庫版を使用した。

現代語の辞典としては、1988年に初版が刊行された『大辞林』の第二版、1995年版を参照した。

2.3.3. デジタルアーカイブ

近代語のコーパスとして、国立国語研究所が2006年から公開している『近代女性雑誌コーパス』がある。これは若松賤子の『小公子』に続く明治後期から大正期に、同じような読者層を対象として出版された女性雑誌3種から、40冊抽出した全文コーパスである。

近代女性雑誌コーパス

対象雑誌：	『女学雑誌』(女学雑誌社)	1894/1895年	31冊
	『女学世界』(博文館)	1909年	6冊
	『婦人倶楽部』(講談社)	1925年	3冊

『近代女性雑誌コーパス』は、若松訳『小公子』に使用される翻訳語や外来

語が、明治後期から大正にかけて、どのように使われているかを知る手掛かりとなる。

2.4. 基本語彙と基本外来語

日本語の基本語彙に関しては、島村（2013）をはじめ、さまざまな研究がなされており、基本語彙の中の外来語、あるいは基本外来語としても、金（2012）らが新聞コーパスを作成し、国立国語研究所｛1984｝が『日本語教育のための基本語彙調査』を行っている。また、玉村（1991）も「日本語における外来要素と外来語」として基本外来語170語を提唱している。本稿では、これらのリストを参考にしながら、外来語の一般語彙化の程度を検証する。

3．翻訳語としての外来語

外国の文物を日本語で紹介するにあたり、抽象的な概念を表す語については、漢籍の素養を併せ持つ森林太郎（森鴎外）、福沢諭吉などが、漢語に訳し、それが語によっては幾多の変遷をみながら定着していった（今井　2013）。LLFは児童文学に分類されるもので、抽象的な概念や難解な表現はみられない。しかし読者がそれまで見たことも聞いたこともないものやことがらを表現するには、原語の音を表記した外来語に頼ることになる。本稿で扱う「外来語」とは、欧米語の音が取り入れられ、日本語と同様に使われる一般語であると定義する。言語の音を表すのにカタカナが用いられるが、他の和語、漢語と結びついた混種語もみられる。若松訳に使用される混種語の例としては、「菓子パン」「インキつぼ」がある。

明治期にはどの程度外来語が使用されていたかを探る手掛かりのひとつとして、辞書が考えられる。『言海』に採集された類別表（大槻　2013:1254-5）によれば、外来語の中でも英語に起源をもつ語は73語あり、欧米語の中では、オランダ語の85語に次いで多い。外来語の総計は549語であるが、それには「唐音語」96語が含まれているので、今野（2014:43）は、『言海』の見出し項目のうちに外来語が占める割合は1.2%であるとしている。一方、外来語が現代日本語に占める割合は、増加の一途をたどっている。国立国語研究所（1964）がまとめた「雑誌九十種の語彙調査」（調査年1956年）によれば、外来語が語種の構成に占める割合は、異なり語数では9.8%、延べ語数では2.9%であった。同じく国立国語研究所（2005）の「月刊雑誌70誌の調査」（調査年1994年）では、それが異なり語数で35.8%、延べ語数で12.2%と激増している。さらに宮島（2008）は、これらの調査年の1956年から1994年のおよそ40年間に、外来語

が雑誌の基本語彙にも進出していることを報告している。国語辞書の見出し語と雑誌に使われる語との単純比較はできないが、『言海』が編纂され、若松賤子が『小公子』を連載した明治中期においては、外来語は数少ない、目新しいものであったことが窺える。

今野（2013）では、人名や国名などの音をカタカナ表記にした語に加え、イギリスを英国、アメリカを米国というような漢語系の造語も、明治の中期にはすでにみられることが報告されている。　本稿では、LLF の翻訳において、人名、国名、地方名など多数の固有名詞が、カタカナ表記されていることから、これらも外来語に含めて考察する。

外来語の提示にあたっては、振り仮名を利用して、音と意味とを漢字の組み合わせと仮名で表すことができる。そうすることで、まだ外来語として定着していない語の音と意味とを知らしめることが可能になる。例えば、若松賤子訳の『小公子』には「暖室炉(ストーブ)」という組み合わせがみられる。

加藤（2012）文芸の翻訳家は、異文化、異なった歴史、異質の風土で成立した文学作品を発見し明治期の翻訳では、適当な訳語がない場合、原文のまま提示することも多かったことを指摘している。これは森鴎外、二葉亭四迷などによる翻訳にも見られるが、若松訳にはみられない。

4．外来語の変遷

若松訳にはおよそ40語の一般名詞が外来語として使用されている。「およそ」とするのは、中に誤訳と思われるものや、同義語で別表記の語が含まれているからである。同時期に編纂された『言海』に収録されている外来語に照らし合わせると、重なっている語は少ない。これは明治中期において、外来語が定着しておらず、表記にもゆれがあったことを示唆しているのではないだろうか。それでも若松は異国の文化を伝えることばとして、外来語を用いたと考えられる。

まず、若松訳に現れる外来語の中で、意味や表記が変化してきているものをその語源からグループ分けし、考察する。

4.1. 英語以外の言語に起源をもつ外来語

『言海』の外来語の収録状況からも分かるように、明治中期の外来語は、英語よりオランダ語を起源に持つ語の方が多かった。また古くはポルトガル語から借用されたものもあった。表 1 に 2 例を挙げる。

表1　英語以外の言語に起源をもつ外来語

LLF	若松訳	村岡訳	坂崎訳	言海	大辞林
glass	コツプ	コップ	コップ	コツプ（蘭）	コップ
		グラス	グラス		グラス
flag	フラホ	旗	旗		フラフ

『言海』では「コツプ」がオランダ語を起源に持つ語として挙げられており、その意味としては「杯ノ脚アリテ高キモノ」となっている。これは、現代語の「グラス」と同等のものであり、同じく現代語の「コップ」が主に脚のない、寸胴型のものを指すのとは異なる。英語では脚のあるなしに関わらず、ガラス製の飲み物用の食器を glass と呼ぶ。村岡訳、坂崎訳においては、ビールを注ぐものが「コップ」、ポート酒などを注ぐものが「グラス」と分けられている。窓や食器棚の扉に使われるガラス板も、英語では glass であり、現代語では「ガラス」となる。若松訳では「瑠璃窓」となっていて、外来語としては訳出されていない。近代女性雑誌コーパスでは、「ガラス」の初出は1894年であり、1909年になると8件あった。一方、「瑠璃」では1894年以降、24例検出した。

若松訳にみられる flag の訳語として、「フラホ」は現代に通じるものではない。フラホについては、『女学雑誌』38号（1894）に記載がある。筆者不詳であるが、「言語混淆」と題した文章の中で、「外國語の混じて日本化したるものを聞くこと尠なからず」とし、その21例の中に「フラフ」を挙げている。フラフは furafu と同一であり、それは英語の Flag　フラツグと同義語であることが記されている。『女学雑誌』は1889年に若松賤子と結婚することになる巌本善治が長く主筆をつとめた雑誌であるが、巌本自身が複数のペンネームを用いて様々な記事を書いていることが知られている。また、巌本が後序を記している昭和3年版の若松賤子訳『小公子』では、「フラホ」が「フラフ」と変わっている。外来語のリストを掲げる中、わざわざ「フラフ」を取り入れていること、またその掲載雑誌に大きな影響力をもっていたと思われる巌本が、のちに「フラフ」を若松訳に取り入れていることから、明治期に「フラフ」が「旗」の意味で使用されていたことが分かる。さらに、現代においても、『大辞林』にオランダ語起源の、「旗」を意味する語として「フラフ」が挙げられていることと、一部の地方（例：高知県　http://www.webkochi.net/waza/furafu.php）では現在も「フラフ」が旗の意で使用されていることから、明治中期の若松訳に用いられたオランダ語起源の外来語が、限られた状況ながらも現在に通じていることが分かる。

4.2. 誤訳と意訳

南谷（2008）は、若松訳の中には、意図的と思われる省略、訳もれのほかに、語義・語法の誤りからくる誤訳が見られることを指摘している。そのため、若松訳で用いられた翻訳語、外来語のうち、後の2訳では使用されていないものがいくつかある。まずEarlであるが、若松訳では「侯爵」となっているが、その後の訳では「伯爵」となっており、後者は英国の爵位の訳語として定着している。

また、英国の上流階級のための学校として有名なEtonは、原作ではWhen boys were at Etonとなっているところ、若松訳では「イヽトン なる邸内」と誤訳されている。村岡訳、坂崎訳では「イートン校」と、イートンという名の学校であることが分かるように訳されている。

称号としては、Sir Lorridaileが若松訳ではそのまま「サア」となっているのに対し、村岡訳、坂崎訳では「卿」が使われている。若松訳では、「サア」（カタカナ表記）がそのままにかけ声としても多用されているが、称号としての「サア」との違いは、そのあとに読点（現代語訳では中黒・を用いることが多い）を打ち、「サア、ロリデール」となっているので、若松の中で使い訳があることが分かる。さらに、使用人などが目上の人々に使う尊称としてのSirについては、若松の場合、「旦那」などの表現にかえてその意を含ませている。

さらに、語源が不明で、誤訳が誤植を生んだのではないかと考えられる訳語が見られる。それが「シヤアツク」である。自分の息子を侯爵（伯爵）家の跡取りであると虚偽の申し立てをするアメリカ人女性を表現することばであると推察できるが、意味は不明である。

LLF	a bold-faced, black-eyed thing
若松訳	シヤアツクで、眼玉の黒い変な
村岡訳	あつかましい顔をした
坂崎訳	黒い目でずうずうしい顔

若松賤子は『女学雑誌』に掲載された原稿を推敲中に火災にあい、原稿は焼失する。そのいきさつは、相馬（1997）に詳しい。『小公子』が単行本として出版されたのは没後で、夫であり、また『女学雑誌』の主筆でもあった巌本善治が編集している。しかしながら、巌本編集の昭和3年版の若松訳でも、「シヤアツク」は修正されていない。さらに語源をたどり、解明する必要がある。

若松賤子が意図的に意訳をしたと思われる語に、Tiffanyがある。Tiffanyは

ニューヨークに本店をもつ大規模な宝飾店であったが、若松は単に「大店」と訳している。それが村岡訳では「大店のティファニー」となり、坂崎訳では「ティファニー」となっている。「ティファニー」という固有名詞が、読者層にどのくらいなじみがあるかで、訳し方が変化してきたものと思われる。

4.3. 飲食に関する外来語

LLF には、明治期の日本ではまだ一般に知られていなかったであろう食べ物や飲み物が出てくる。これらを表 2 にまとめる。

表 2　食べ物と飲み物の外来語

LLF	若松訳	村岡訳	坂崎訳
biscuit	ビスケツト	ビスケット	ビスケット
cracker	（菓子）パン/バン		
cheese	（訳出なし）	チーズ	チーズ
port	ポウト酒	ぶどう酒	ポートワイン

LLF には biscuit が 1 回、cracker(s)が 6 回使用されている。イギリス英語では、biscuit（ビスケット）は甘い焼菓子を意味することが多いが、チーズとの組み合わせで食するものは、cracker とよぶ場合と、慣例的に biscuit（例 cheese and biscuit)とよぶ場合とがある。一方、cracker は、19世紀前半、アメリカでつくられるようになった塩味の、乾燥パンに似たもの[1] であり、National Biscuit Company（現 Nabisco）のように同一会社が biscuit と cracker とを製造していることもある。また、LLF 出版当時、アメリカではすでに biscuit より cookie が同じ焼菓子の呼称として定着していた（Smith 2004:317）ことからも，原作者、Frances Hodgson Burnett がイギリス英語とアメリカ英語を意識的に区別していたことは十分に考えられる。それを読み取ってのことか、若松訳では biscuit と cracker を区別しているのに対し、村岡訳、坂崎訳では「ビスケット」で統一されている。

チーズはなじみがなかったのか、若松訳では訳出されていない。一方、port は若松訳ではポウト酒、村岡訳では外来語ではなくぶどう酒、そして坂崎訳ではポートワインと訳されている。

4.4. 国名の漢字表記

鳥井（2008）は1869年の『掌中万国一覧』と1874年の『文明論之概略』を挙

げ、明治中期までに外国名の漢字表記が定着していたとしている。若松賤子訳でも、「支那人や、土耳児人」という表現で、国名に漢字表記が用いられている。村岡訳、坂崎訳では「中国人」「トルコ人」となっている。

若松訳では、国名の表記にカタカナも使用されている。詳しくは次章で述べる。

5. 外来語の継続

若松訳と、そのおよそ70年後に出版された村岡訳、さらにおよそ100年後に出版された坂崎訳を比較してみると、カタカナ表記の語が似ていることに気付く。原作がアメリカとイギリスとを舞台としており、地名や人名をそのままに音訳していることから、カタカナで表される言葉のほとんどが三訳に共通して登場する。

5.1. 登場人物名

英語を起源とする固有名詞、特に人名においては、明治期においてまだその表記が確立しているとはいえず、ゆれが見られるものの、若松訳、村岡訳、坂崎訳を比べると、どの表記がどの名前を指しているのか、容易に判断がつくことが多い。

表 3 に出現頻度の高い登場人物名をあげ、村岡訳、坂崎訳と対照する。

表 3 『小公子』の登場人物名

	若松訳	村岡訳	坂崎訳
1	エロル/エロル	エロル	エロル
2	セドリツク	セドリック	セドリック
3	ホツブス	ホップス	ホップス
4	ドリンコート	ドリンコート	ドリンコート
5	ハヴイシヤム	ハビシャム	ハヴィシャム
6	ドウソン	ドウソン	ドーソン
7	ロリデール	ロリデール	ロリデイル
8	ブリジエツト	ブリジェット	ブリジット
9	メレ	メアリ	メアリー

10	タマス	トマス	トーマス
11	ビレ・ビレイ	ビリー	ビリー
12	ヂツク	ディック	ディック

表3でハイライトされている人名は、他と共通するものである。若松訳における旧仮名遣い、村岡・坂崎訳では促音に小さい「ツ」をあてるという表記上の慣例をのぞけば、例1-4は三訳に共通点が見られることは明らかである。例5-8では、現代語訳である村岡訳と坂崎訳とのあいだにゆれがみられる。日本語にないvやjeの音をどう表記するかが違いとなっている。以上、新旧仮名遣いによる違い、促音表記の慣例、日本語にない音の表記、長母音化のゆれを、三訳の共通項を見出す際の許容範囲であるとするならば、12例中の8例までが、明治中期から現代まで通用する人名表記であるといえるだろう。例9-12は、長音化するかしないかという違いをのぞいて、村岡訳、坂崎訳には共通していて、若松訳とは違っている人名である。例9が唯一の例外である。「メレ」は、他に例をみない。

5.2. 国名と地名

現代日本語にみられる「アメリカ」「イギリス」を始めとする国名や地名は、音がそのままに訳されている。「アメリカ」はもともと漢字をあてて「メリケン」とされており、「イギリス」も「エゲレス」として漢字があてられていた。それぞれの一番上の文字をあてて、「国」や「人」と組み合わさり、造語されてきた。

藤本（1993）、飛田（1998）らは、明治初期における外国地名は、漢字表記が大勢であったとしている。一方、井手（2005）は、太陽コーパス[2]を用いて調査を行い、1917年から1925年（大正期）にかけて、国名、地名が漢字表記からカタカナ表記への移行が顕著にみられると報告している。LLFの若松賤子訳が『女学雑誌』に連載されたのは1890年から1892年にかけてであり、明治中期にあたるが、この時期における外国地名の表記に関する包括的な研究は少ない。井手（2005）から若松訳に登場する国名、都市名を抽出して出現比率をまとめたものが表4，5である。

表４　国名の表記

アメリカ	亞米利加
12%	88%

イギリス	英吉利
0 %	100%

表５　都市名の表記

ニューヨーク	紐育
25%	85%

ロンドン	倫敦
14%	86%

なお、井手（2005）では、各統計をグラフのみで表示し、具体的な数値を提示していないため、出現率は筆者の概算による。表４および５から明らかなように、「アメリカ、イギリス、ニューヨーク、ロンドン」といったカタカナ表記は、太陽コーパスを見るかぎり、大正期までほとんど使用されていない。

若松訳『小公子』では、「アメリカ」、「イギリス」に並行して、「米国」、「英国」も多用される。ただし、「英人」とされることはあっても、「米人」はあらわれず、かわりに「アメリカ人」とされる。『言海』では「ベイ・米」として項目をたて、「メリケンの略、－国、－人」と解説している。「英・エイ」の項目はないが、「英語、英国」があり、それぞれ「イギリス国のことば、イギリス国の人」と解説されている。これらの例から、アメリカ、イギリスをそれぞれ「米、英」という漢字を用いて示す習慣は、明治中期にすでに確立されており、それが現代語にも継続していると考えられる。

若松訳においては、表４の国名はカタカナ表記に加えて「米国、英国」が用いられており、その国の人（々）という意味では、「アメリカ人」、「イギリス人」または「英人」などが用いられている。若松訳における英米の国名、都市名の表記は、より現代に近いと言えるだろう。さらに、井手は、著者の生年別カタカナ・漢字表記の使用率をしらべ、若松賤子の生年である1960年代の人々は、カタカナを使う頻度が極めて低いとしている。それが村岡花子（1893-1968）の年代である1890年代に生まれた著者の間では、漢字およびカタカナ・漢字の併用の率を上回り、カタカナ単独使用率が50%を超えている。井手は1925年でカタカナ表記が急増加した理由として、生年の遅い著者が増加したことを挙げているが、若松訳、村岡訳、坂崎訳をみる限り、これはあてはまらないようである。

5.3. 敬称

Mrs. と Miss は、鄧牧（2013）に「明治期からの外来語」として挙げられている。若松訳、村岡訳、坂崎訳では、それぞれ「ミセス」「ミス」と訳してお

り、現代にまで続く外来語として考えてよいだろう。

5.4. 日常生活の外来語

日常生活で使うものを示す語の中から、2例選んで表6にまとめる。

表 6「ストーブ」と「マッチ」

LLF	若松訳	村岡訳	坂崎訳	言海	大辞林
stove	暖室炉（ストーヴ）	ストーブ	ストーブ	ストウヴ（英）	ストーブ
match	マチ/マツチ	マッチ	マッチ		マッチ

まず、前述の「暖室炉（ストーヴ）」を再考する。『言海』では、英語に起源をもつ語として、「ストウヴ」を立て、「カツペルに同じ」としている。「カツペル」をみると、「暖室炉」とあり、その語源はオランダ語となっている。『言海』では「ストウヴ」より「カツペル」の方がより一般的な語として挙げられているが、その後の村岡訳でも坂崎訳でも、該当箇所はストーブとなっており、原作にある stove は、現代語のストーブに統一されたと考えられるのではないだろうか。近代女性コーパスでは、1909年の「ストーブ」3例が初出である。他の文芸作品とくらべ、早い時期に若松訳でストーヴが使われている理由のひとつは、若松賤子自身が学び、生活したフェリス女学校に大きなストーブがあった（相馬　1997:120）ことであるかもしれない。

イギリス人 John Walker が発明した[3] とされる match は、若松訳では「マチ」または「マツチ」となっている。これは村岡訳、坂崎訳、さらには『大辞林』の「マッチ」となる。

5.5. 服飾品関係の外来語

森岡（1977）は、外来語の一般的な受け入れには時間を要し、例外的にファッションなどの特定の領域には多くみられるとしているが、LLF の翻訳でも、若松賤子がすでに服飾品に外来語をとりいれており、それが現代までも継続して使われていることがわかる。

表7　ファッション（服飾関係）に関わることば

LLF	若松訳	村岡訳	坂崎訳	言海	大辞林
knicker-bockers	膝切ヅボン	短いズボン	みじかいズボン	ずぼん(＊)	ズボン ニッカーボッカーズ
lace	レース	レース	レース		レース
flannel	フラネル	（訳出なし）	（訳出なし）		フランネル
pocket	ポツケツト	ポケット	ポケット		
handker-chief	ハンケチ	ハンカチ	ハンカチ		ハンケチ⇒ハンカチ
button	ボタン	ボタン	ボタン	釦	ボタン
parasol	日傘	（訳出なし）	パラソル		

ニッカーボッカー（ズ）は、『大辞林』の見出し語にもあり、ズボンの一種として認知度は高いのではないだろうか。「ズボン」はしばしばフランス語を起源とする外来語と考えられており、澤田（1993）をはじめ、基本語彙に含まれる外来語として扱う研究者は多い。しかし「ずぼんと入る」という擬態語を語源とする説もある。『言海』ではひらがな表記をしているところから、大概は外来語とは認めていなかったことが分かる。何れにしても、「ズボン」が明治中期には確立した語であり、それが現代語にも受け継がれていることは確かなようである。日傘を意味する parasol は、若松訳ではそのまま漢語として「日傘」とされている。村岡訳ではその訳出はみられないが、坂崎訳では外来語の「パラソル」を使っている。パラソルも日傘も、現代に通じることばであり、同義語であることは、大辞林の語釈でも明らかである。ハンカチあるいはハンケチは、ハンカチーフの略されたものであるが、これも時代を超えて使用されている語である。

フランネルあるいはフラネルは、上質の薄手綿またはウール生地を指す。若松訳で「天鵞絨」と訳されている生地は、村岡訳、坂崎訳では「ビロード」となっている。近代女性雑誌コーパスで「ビロード」が登場するのは1925年の記事である。ファッション用語ははやりすたれに影響されやすく、年代によってその認知度も変わる。しかし「ボタン」や「レース」なども含めて、ファッションの基本語彙としては今に継続するものであると言えるのではないだろうか。

6．おわりに

本稿ではLLFの翻訳にみられる外来語を、その変遷と継続に分けて考察した。若松訳にもちいられる外来語のうち、一般名詞はわずか40語ほどにすぎない。その多くが表記上の変遷をとげながらも村岡訳、坂崎訳に受け継がれ、現代語の基本語彙に含まれるにいたっていることは興味深い。

固有名詞の場合、同時代の作家、文筆家に比べ、若松賤子がより現代語に近い形で外来語音を取り入れていることも判明した。

固有名詞では、まず国名や都市名の表記に、若松訳の「新しさ」がみられる。若松は大正期まで定着しなかったとされる「アメリカ」「イギリス」「二ユーヨーク」などのカタカナ表記を多用しているのである。人名のカタカナ表記も、表記のゆれ、仮名遣いの違いを考慮にいれれば、現代でも十分に通じるものである。

若松訳に使用されている外来語は、新しいものばかりではない。パンやボタン、コップ、ガスなど、ポルトガル語やオランダ語を起源とし、江戸時代から使われていたと思われる外来語もある。また外来語であるかどうかは定かではないが、「ズボン」も明治期から現代まで、継続して使われている語のひとつである。ただし、「ズボン」の語感は、古めかしさを否めない。ニッカーボッカーやフランネルも同様である。それは原作の時代背景を反映するためには不可欠な語彙群であるかもしれない。時代が離れても、若松訳にみられる外来語が現代語にも受け継がれ、また現代語の基本語彙としても取り上げられるということは、それだけ若松賤子のことばが、現代日本語の根幹に近いものをもっていることの証のひとつと考えてもよいのではないだろうか。

外来語ひとつひとつの初出年度の検証や、使用頻度など、通時的かつ量的考察は困難である。今後様々な文献がデジタル化され、またコーパスとして利用可能になることが望まれる。

注

1 Guide to the National Biscuit Company Photograph Album, 1900-1935 http://library. duke.edu/rubenstein/findingaids/nationalbiscuitcompany/ 参照日 2014年10月20日他

2 太陽コーパスは国立国語研究所が公開している明治後期～大正期の総合雑誌『太陽』から５年分を抽出した文コーパスである。総文字数約1450万字、著者数訳1000人

3 "In 1826, John Walker, a chemist in Stockton on Tees, discovered through lucky accident that a stick coated with chemicals burst into flame when scraped across his hearth at home. He went on to invent the first friction match." BBC A History of the World: John Walker's Friction Light http://www.bbc.co.uk/ahistoryoftheworld/objects/hQR9oN5 LTeCLcuKfPDMJ9A 参照日 2014年10月20日

参考文献

(2004). Oxford Encyclopaedia of Food and Drink in America Vol 1. New York: Oxford University Press.

Cross Naomi (2013) 'The duality of the Japanese vernacular movement and the emergence of modern Japanese: The role of Wakamatsu Shizuko, "Study of Languages" No. 1 Himeji Dokkyo University

Thwaite Ann. (1994). "Waiting for the Party: The Life of Frances Hodgson Burnett 1849-1924". London: Faber & Faber.

Thwaite Ann. (2014). "Beyond the Secret Garden: The life of Frances Hodgson Burnett". London: Bello (Pan Macmillan).

伊藤由樹子. (2008). The Background and Birth of English Words Coined in Japan 和製英語の背景とその生まれ方. 二松學舍大學論集 51, 109-123.

井手順子. (2005).「外国地名表記について －漢字表記からカタカナ表記へ－」. 国立国語研究所, 雑誌『太陽』による確立期現代語の研究 －『太陽コーパス』研究論文集－ (ページ: 157-172).

池上秋彦. (1970). 「明治期における外国語の輸入について －特に handkerchief と ink の場合－」. 『文芸研究』 第24巻, 63-74.

今野真二. (2013). 『百年前の日本語 －書きことばが揺れた時代』. 岩波新書.

今野真二. (2014). 『『言海』を読むことばの海と明治の日本語』. 角川選書.

大槻文彦. (2012). 『言海』 (初版1889年、底本628刷 1931年版). 筑摩書房.

加藤百合.（2012）.「明治期文藝の翻訳」.『文学』 第13巻　第４号, 67-80.
樺島忠雄.（1981）.「日本語はどう変わるか」『－語彙と文字』－. 岩波書店.
金愛蘭.（2012）.「日本語の基本語彙に入り込む外来語」.『日本語学』, 78-91.
クロス尚美（2014）.「言文一致体と現代日本語との関係性　翻訳『小公子』にみられるオノマトペ表現の比較を通して」『姫路獨協大学外国語学部紀要』第27号　1 -15
国立国語研究所.（1964）.『現代雑誌九十種の用語用字（3）分析.』 秀英出版.
国立国語研究所.（1984）.『日本語教育のための基本語彙調査.』 国立国語研究所.
国立国語研究所.（2005）.『現代雑誌の語彙調査　－1994年発行70誌－』 国立国語研究所.
齋藤文俊.（2013）.「明治初期における翻訳小説の文体の相違と可能表現」.『国語と国文学』　第90巻　第11号, 15-24.
澤田田津子.（1993）.「日本語教育のための基本外来語について」.『奈良教育大学紀要』　第42集　第１号, 225-239.
島村直己.（2013）.「日本語の基本語彙に関する研究」.『国語研プロジェクトレビュー』　Vol. 3 No. 3, 133-141.
相馬黒光.（1997）.『黙移』. 東京: 日本図書センター.
田中牧朗.（2005）.「外来語の言い換えと規範」.『日本語学』　第24巻　第10号, 6 -19.
玉村文朗.（1991）.「日本語における外来要素と外来語」.『日本語教育』　74号.
鄧牧.（2013）.「大正期における外来語の増加に関する計量的分析」.『国立国語研究所論集』（NINJAL Research Papers）6, 1 -18 .
鳥井裕美子.（2008）.「近世日本のアジア認識　－鎖国を超えた知識人」.『南山大学アジア・太平洋研究センター報』　第４号, 22-31.
福田眞人.（2008）.『明治翻訳語のおもしろさ』. 言語文化研究叢書　名古屋大学大学院国際言語文化研究科, 133-145.
不詳.（1894）.「言語混淆」　『女学雑誌』　38号　P017A015 ～ P017B023.
南谷覺正.（2008）.「若松賤子　『小公子』の翻訳について」.『群馬大学社会情報学部研究論集』　第15巻, 217-236.
宮島達夫.（2009）.「語彙史の比較（1）日本語　（雑誌90種と70誌）」.『京都橘大学研究紀要』　35.

Continuity and Disjuncture in Translation of "Little Lord Fauntleroy": A comparative study of three translation over a 100 year period

Naomi Cross

The Meiji era was in so many ways dynamic. With the influx of western cultures and ideas, be they concrete or abstract, the Japanese language had to accommodate the new and the different. Some ideas were translated into new Kanji compound words, and some were transcribed phonetically as loanwords. Foreign names of people and places had to be transcribed. This paper focuses on loanwords used in the translation of "Little Lord Fauntleroy" (Frances Hodgson Burnett) by Wakamatsu Shizuko. Wakamatsu Shizuko's translation is analysed in comparison with writings of her contemporaries and two modern translations by Muraoka Hanako and Sakazaki Asako, some 70 and 100 years later respectively. For this study, dictionaries of the Meiji period and present time, digital corpus of women's magazines covering the period from Meiji to Taisho, and the digitalised texts of the three versions of translation in discussion were used. Through these comparative examinations, linguistic characteristics of Wakamatsu Shizuko's writing have been highlighted. This paper presents that, many loanwords including proper nouns share more similarities than differences among the three translations of "Little Lord Fauntleroy" over a one hundred year period. This is of particular interest as Wakamatsu Shizuko's choice of words in translation does not seem to follow the convention of her time. Many of the loanwords used by Wakamatsu Shizuko are found in the standard vocabulary lists of today proposed by various bodies and scholars. Indirectly though, it may be, that these findings support the underlying hypothesis claimed by Cross (2013) and Kurosu (2014) that Wakamatsu Shizuko's writing is the origin of modern Japanese.